

風はささやく

小川未明

青空文庫

高窓の障子の破れ穴に、風があたると、ブー、ブーといつて、鳴りました。もう冬が近づいていたので、いつも空は暗かつたのです。まだ幼年の彼は、この音をはるかの荒い北海をいく、汽船の笛とも聞きました。家から外へ飛び出して、ひとり往来に立つていると、風が、彼の耳もとへ、

「明日は、いいことがある。」と、ささやきました。

「そうだ、きっとお父さんが、明日帰つていらつしやるのだ。」

彼は、希望を持つて、明るくその一日を過ごすのです。

彼の生まれた町は、小さな狭い町でした。火の見やぐらの頂に、風車がついていて、風の方向を示すのであるが、西北から吹くときは、天気がつづいたのであります。空あき車の上へ馬子が乗つて、唄などうたい、浜の方へ帰る、ガラ、ガラという、轍の音が、だんだんかすかになると、ぼんやり立つて、聞いている彼の耳もとへ、風は、

「明日は、いいことがある。」と、ささやくのでした。

すると、急に彼の目は、喜びに燃えるのでした。

「そうだ、明日は、お客様があるのであるのかもしれない。」

まれに、彼の家へ珍しい客があつて、おもしろい話をしてくれるのを、彼は、どんなにうれしく思つたでしよう。

ある日、彼は、停車場で、美しい女人の人を見ました。ようすつきから、この土地の人でなく、旅の人だと、いうことがわかりました。そして、いいしれぬやさしい顔は、かえつて悲しみをさえ感じさせたのです。彼は、その人の顔を忘れることができませんでした。汽車が遠く去つてしまつた後、かぼちゃの花の咲く園に立ち、無限につづく電線の行方を見やりながら、自由に大空を飛んでいるつばめの身を、うらやんだことがありました。ちょうど、そのころ、他国から帰つた、親類のおじさんがありました。一同は、この人のことを道楽者だと、よくいわなかつたけれど、彼には、いつも思いやりのある言葉をかけてくれたし、怒つた顔を見せなかつたので、なんとなく慕わしく思われました。おじさんは、孤独なのが、さびしかつたのでしよう、ときどきマンドリンなど鳴らして、ひとりで自分をなぐさめていました。このことを知つたときから、彼にも音楽が、なによりか好きなものとなつたのです。

彼の少年時代は、いつしか去りました。そして、小さな町をはなれて、大きな市へ移るころには、彼はもうりつぱに働きのできる若者でありました。けれど、心に芸

術^つを忘^{わす}れなかつたのです。

町^{まち}の中^{なか}を川^{かわ}が流れ^{なが}ていた。

橋^{はし}の畔^{たもと}に食^{しょく}堂^{どう}

がありました。

かれこの家^{いえ}で友^{とも}だちといつ

しよに酒^{さけ}を飲^のんだり、食^{しょく}事をしたのでした。

和^{わよ}洋^よ折^つ衷^{ちゆう}のバラツク式^{しき}で、室^{しつ}内^{ない}には、

大き^{おお}な鏡^{かがみ}がかかつていました。その傍^{かた}らには、

幾^{いく}つもびんの並^{なら}んだ棚^{たな}が置^おいてあつた。酒^{さけ}

と脂^{あぶら}のにおいが、周^{しゆう}囲^いの壁^{かべ}や、器^き物^{ぶつ}にしみついて、汚^{よご}れたガラス窓^{まど}から射^さし込^こむ光^{こう}

線^{せん}が鈍^{にぶ}る上^{うえ}に、たばこの煙^{けむり}で、いつも空^{くう}気がどんよりとしていました。たとえ四季^{しき}おり

おりの花^{はな}が、棚^{たな}の上^{うえ}に活^いけてあつても、すこしも新^{しん}鮮^{せん}な感^{かん}じを与^{あた}えず、その色^{いろ}があせて

見^みえた。それとくらべていいように、そこにいる女^{おんな}たちは、濃^こく口^{くち}紅^べをつけ、顔^{かお}に厚く

白^{おしろい}粉^ぬを塗^ぬつていたけれど、なんとなく若^{わか}さを失^{うしな}い、疲^{つか}れているよう^みに見^みえたのです。

しかるに、彼^{かれ}は、あるとき、ハー^{モニ}カ^カで、「故^故郷^郷の歌^{うた}」をうたいました。

目に広^{ひろ}び

々とした、田^{でん}園^{えん}を望^{のぞ}み、豊^{ほう}穣^{じよう}な穀^こ物^{もの}の間^まで働く男^{だん}女^{じよ}の群^むれを想像^{そうぞう}し、嬉々

として、牛^{ぎゅう}車^{しゃ}や、馬^{うま}の後^{あと}を追^おう子供^{こども}らの姿^{すがた}を描^たいたのであります。

一曲^{きょく}終^おわると、すすり泣^なく女の声^{こゑ}がしました。

翌^よ日^{くじつ}この店^{みせ}をやめて、故^故郷^郷へ帰^{かえ}つた

おんながります。彼^{かれ}女の故^{かのじよ}郷^{きょう}が、彼^{かれ}の歌^{うた}が、彼^{かれ}女の魂^{かのじよ}を呼びもどしたのです。

メーデーの日^ひでした。丘^{おか}の上の新^{しん}緑^{りょく}が、風^{かぜ}に吹^ふかれて、さんさんとした、日の光^{ひかり}の

なかおどりで躍つて いました。見わたすと、乳色の雲が、ちようど牧人の、羊の群れを追うよ
うに、町を見おろしながら、飛んでいくのでした。風は、彼の耳もとへ、

「明日は、いいことがある。一と、いつものように、希望をささやきました。
かれ彼は、友だちと腕を組み、調子をそろえて、労働歌をうたつた。その声の響く間は、
美しい数々の幻想が浮かびました。

たとえば、百貨店にあるような、赤、青、緑の冷たく透きとおるさらや、コップなどを
製造するガラス工場の光景とか、忽然それが消えると、こんどは、高い煙突
から黒い煙が流れ、また幾本となく起重機のそびえたつ、大きな鉄工場が現れる
のでした。そして、歌がやむとともに、それらの形と影もどこへか没してしまいました。
かれ彼が、またハーモニカで、インターナショナルをうたつたときには、洋々たる海原が
前面へ盛り上りました。そして、汽船の過ぎた後には、しばらく白浪があわだち、
それも静まると、海草がなよなよと、緑色の旗のごとくなごやかにゆれるのであり
ました。

かれ彼の青年時代は、夢も多かつたかわりに、また、反面あまりに醜かつた現実のた
めに、焦燥と苦悶をきわめたのです。

め
目で見た、一つの例をとれば、ここに毎朝出勤する紳士があります。その人は、
き
気むずかしく、家庭では、なにか気にいらぬことでもあれば、罪のない細君をしかり、
こども
子供をなぐつたりしたのに、出社して、上役の前では、まったく別人のごとく、
あたま
頭をペコペこして、愛想がよかつたのです。しかるに、上役は、冷然として、皮肉
め
な目つきで、その男を見下して、命令します。この場合、だれが聞いても無理と思われ
るようなことでも、男は、服従しなければなりません。風彩からいえば、そ
の男のほうが、上役よりりっぱでした。頭髪をきれいに分け、はいているくつも出か
ける前に、哀れな細君が念をいれてみがいたので、ぴかぴかと光っています。まだ社で
は、それでもいいが、男は、ときどき上役の家庭へも、ごきげんを伺いに出なければな
りません。我が家では、妻や子供らに対して、厳格過ぎるといつてもいいのに、上役
の家では、やんちや坊主を晴れ着の脊中へ乗せて、馬替わりとなつて歩きます。これは、
そうした社会の話であるが、音楽家や、ほかの芸術家も、また同じでした。ある美び
貌の声楽家は、指に宝石をかがやかせ、すましこんで、ステージに立ち、たとえ聴
しゆう衆を睥睨しながら歌つても、蔭では、權力のあるものや、金力あるもののめ
かけであつたり、男どもには、帮間に類するやからが少なくなつたのでした。

こうした社会を見、こうした現実を知るとき、彼は、余の人のごとく、平然たることができなかつたのです。ただ聰明をかいたがため、階級に対しては、組織ある闘争でなければならぬのを、一途に身をもつて、憎いと思う対象にぶつかりました。それ故に、結局へとへとになつて、揚句は酒場で泥酔し、わずかに鬱を晴らしたのです。彼は、芸術を商品に堕落させたやからをも憤りました。街頭へ身をさらし、雪まじりの風の吹く中で、バイオリンを弾き、悲痛の唄をうたつて、道ゆく人の足を止めようとしました。けれど畢竟自分を慰め、苦痛を忘れさせるものには酒以外ないことを知つたが、生まれた日から、今日まで、瞬時も休まず鼓動をつづける心臓に触れて、愕然として、彼は、真に自身をあわれむ気が起つたのでした。

ほんとうに、ブルジョアに隸属する彼らが、よどんだ沼の中につながれた材木であり、縛つたなわもろとも、いつか腐る運命にあるなら、彼は、さながら激流の彼方の岸、此方の岩角と衝突しながら、漂いいくいかだのごときもので、時代の犠牲たることに異いがなかつたのです。

ある日、彼は、若い時分、下宿していたことのある所を通りました。橋の畔にあつた食堂は、もうそこになかつた。あのころの娘は、すべてお嫁にいき、母親となつて、

生まれた子供も、大きくなつたであろう。それだけでなく、あのころの男の子は、兵隊へいたいにいき、なかには、すでに戦死したものもあるであろう。こう考えると、彼は、歩きながら感概無量なのでした。記憶に残る床屋があつたので入りました。もちろん主人もちがつていれば、内部のようすも変わつてきました。それよりも驚いたのは、鏡に映つた自分の姿でした。頭髪は、半分白く、顔には小じわが寄つて、当年の若々しさが、まつたく消え失せてしまつたことです。

ふたたび、路上へ出ると、風が、耳もとで、「みんな流れのごとく去つてしまつた。」と、ささやきました。彼は頼りなく、さびしく、ひとりうなずいたのでした。

丘へ上ると、春のころは、新緑が夢見るよう煙つた、たくさんの木立は、いつの間にかきられて、わずかしか残つていなかつた。足もとには、小さな家屋がたてこんで、ものほ物干しの洗濯物が、夏空の下で、風にひるがえり、すこしぶかりの空き地で、子供が、鬼ごっこをして遊んでいました。

一人ハーモニカを持った、男の子がいました。その子は、鬼ごっこに加わらず、ぼんやり立っていたので、彼は、そばへいき、ハーモニカを借りて、いまなお子供たちに親しまれる、ちようちよう、ちようちよう、菜の花にとまれを吹いて、聞かせたのです。すると、

「子供たちは、鬼ごっこをやめて、

「おじさんは、うまいんだなあ。」と、たちまち彼を取かれり巻まきました。いま子供こどもらの目めは、いざれも遠とおい、美しいものを憧あこがれているのです。彼は、その姿すがたのうちに、少年時代しょうねんじだいの自分じぶんを見みいだしました。そして、あの、なつかしい親類しんるいのおじさんを。

「おじさんは、どこからきたの?」と、子供こどもが、ききました。

「あっちから、君たちとお友ともだちになりにきたのだよ。」と、彼は、答こたえました。 「ほんとう、ここは涼すずしいよ。そんなら、明日あしたから、木きの下したで、おもしろいお話をはなししてくれたり、ハーモニカを吹いて聞きかしておくれよ。」

「いいとも。」

このとき、風は、頭あたまの上うえで、さわやかにささやきました。

「明日あしたから、いいことがある。」

彼の胸むねに、かすかながら、ふたたび希望きぼうがよみがえつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

初出：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

※表題は底本では、「風《かぜ》はやややく」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕一

2017年4月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

風はささやく

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>